

『源氏物語』の六条院秩序の崩壊

— 光源氏の「押し付け」と明石御方 —

田上 莉子

はじめに

・琵琶なむ、まことの音を弾きしづむる人いにしへも難うはべりしを、をさをさとどこほることなうなつかしき手など筋ことになん。(明石、二四三頁) (注1)

・(箏の琴を) 忍びやかに調べたるほどいと上衆めきたり。(中略) これ(明石御方の琵琶の音)は、あくまで弾き澄まし、心にくくねたき音ぞまされる。

(明石、二六六頁)

『源氏物語』に登場する明石御方は「琵琶」・「箏の琴」の名手とされる。源氏の妻や妾とされる女性の中で「箏の琴」を得意とする女性は他にも見られるが、「琵琶」の名手とされる女性は彼女だけである。なぜ、明石御方のみが「琵琶」の名手として登場するのか。本稿では、作中世界

において、そのような明石御方が果たす役割について考証する。また、明石御方のそれが、いかに源氏と関わり物語を動かすことになるのか、明らかにしたい。

一 琵琶と明石御方

当時、琵琶は女性が演奏するには好ましくない楽器だとされていた(注2)。実際、物語作品中にも「琵琶こそ、女のしたるに憎きやうなれ」(少女、三四頁)、「琵琶は」女のせむにうたてに憎げなる姿したるものなり」(『うつほ物語』内侍のかみ、一八五頁)(注3)と登場する。

前述したように、『源氏物語』において、「琵琶」の名手としてまず名前が挙げられる女性は明石御方であろう。実は、彼女は「琵琶」のみならず、父である明石入道から「琴

の琴」、箏の琴」をも伝授されている。繰り返すが、当時女性が「琵琶」を弾くのは好ましくないとされていた。それでは、なぜ明石入道は娘について「この人ひとりにこそあれ。思ふさまことなり」（若紫、二〇四頁）と考えていたにも関わらず、わざわざ「琵琶」をも伝授したのであるうか。「思ふさまことなり」と、特に帝や高貴な人と結婚を考えている娘であれば、貴人に相応しい「琴の琴」や、女性らしい「箏の琴」の伝授こそが相応しかったのではないだろうか（注4）。「源氏物語」では、持ち物と持ち主の性格は別々ではなく、表裏一体に描かれることが多い」と指摘される（注5）。そのことを踏まえると、一般的に、琵琶は女性が演奏するには好ましくないのであってみれば、それを敢えて明石御方の得意な楽器とする以上、何らかの理由があると考えるのが自然であろう。「琵琶」には「女性性の乏しさ」以外の性格もあり、それが明石御方と「琵琶」を結び付けているのではないか。

「琵琶」の持つ「性格」について確認してみよう。

なにがしの皇子の、この花めでたる夕ぞかし、いにしへ天人の翔りて、琵琶の手教へけるは。

（宿木、四六六頁）

ここで句宮は、「なにがしの皇子」が天人から「琵琶」の秘曲を伝授された、という説話を語るのだが、これに類

する話は他の文献にも伝えられている（注6）。このことから考えると、天人のいる天界と「琵琶」との繋がりには、『源氏物語』成立当時、多くの人に周知されていたと思しい。『うつほ物語』で「琴の琴」が天界と結びついているように、当時「琵琶」もまた、天界と繋がりのある楽器とされていたと考えられる。「天界」とは我々人間の住む現実世界を超越した世界と見なせようが、本稿においては、そのような、いわば超現実的な世界を包括する、やや広義の概念として「異界」との用語で統一し、以降、論じていきたい。いづれとなき中に、琵琶はすぐれて上手めき、神さびたる手づかひ、澄みはてておもしろく聞こゆ。

（若菜下、一九〇頁）

ここで注目したいのが、『源氏物語』の六条院女楽における明石御方の「琵琶」演奏だ。その演奏時の姿は「神さび」ていた、つまり「神々しい」姿であったのだという。ここから明石御方の演奏する「琵琶」という楽器の「性格」と彼女自身の「性格」は、同じく天界と結びついた「異界性」を伴ったものであると推測されないか。

では具体的にどのような場面での「琵琶」は演奏されるのか、明石御方が楽器を演奏する場面に注目したい。物語中で明石御方が楽器を演奏する場面は次の表のとおり、物語全体を通して五回である。

表：「源氏物語」における明石御方の演奏場面

巻名	楽器	演奏形態 (合奏相手)	演奏を要 請する人	演奏場面
明石 (二六六頁)	箏の琴	合奏(源氏)	明石入道	源氏と明石御 方の別れの直 前
松風 (四〇七・ 四〇八頁)	琴の琴	独奏	×	物思いの日々 に源氏の形見 をかき鳴らす
薄雲 (四四〇・ 四四一頁)	琵琶	合奏(源氏)	源氏	明石での箏の琴 の音を思い出し た源氏の催促
野分 (二七七頁)	箏の琴	独奏	×	六条院で手す さびに弾く
若菜下 (一九三頁)	琵琶	合奏 (六条院の女君達)	源氏	六条院女楽

そのうち「琵琶」は二回演奏されているのだが、いずれも明石御方が源氏に演奏を要請され、それに応えているものである。逆に言うと、源氏が明石御方に演奏を要請するのは、いつも「琵琶」なのだ。「箏の琴」も名手とされているのにも関わらず、源氏が「琵琶」の演奏のみを要請するのはなぜだろうか。

また、ここで特に注目したいのが薄雲巻の演奏場面だ。源氏との合奏は、次のように描かれている。

(源氏が) 箏の琴のあるを引き寄せて、かの明石にて小夜更けたりし音も、例の(箏の琴の音色を) 思し出でらるれば、琵琶をわりなくせめたまへば、すこし掻き合はせたる、いかでかうのみ具しけむと思さる。

(薄雲巻、四四〇～四四一頁)

源氏が「箏の琴」の音色を思い出して、明石御方に「琵琶」の演奏を「わりなくせめたまふ」のは不自然ではないか。源氏が明石御方に「琵琶」を要請する場面は腑に落ちないことばかりなのだ。表に見られるように、明石入道が源氏に聴かせようとした楽器も、明石御方が手すさびに演奏をする楽器も「箏の琴」である。また、直接の演奏場面ではないので前掲の表においては省略しているが、源氏と明石御方の初めての逢瀬の場面でも、彼女は直前まで「箏の琴」を演奏していたことが窺える(注7)。このように見ていくと、明石御方が自分の意志で演奏しようとする楽器は「箏の琴」であると思われる。にも関わらず、源氏が「琵琶」の演奏ばかりを要請するのは、「琵琶」ならではの特徴を明石御方に要求しているからではないか。前述のとおり、「琵琶」には「異界」と相通じる「性格」があった。だとすると、源氏は「琵琶の持つ異界性」という「性格」を認識しつつ、

そのイメージを明石御方に強いて担わせようとしているのではないか。そのため、明石御方が演奏する「箏の琴」と、源氏が彼女に押し付ける「琵琶」との間で「ずれ」が生じてしまったとは考えられないだろうか。ここでは、源氏による「琵琶」演奏の要請は、明石御方へのイメージの押し付けであるとひとまず仮説を立てておく。

二 明石御方と異界の繋がり

明石御方と「異界」との関連について思いを致すとき、一般的に思い起こされるのは明石一族への神の靈験ではないだろうか。これは明石御方の誕生前から明石入道に示されていたのだという。

わがおもと（明石御方が）生まれたまはむとせしその年の二月のその夜の夢に見しやう、みづから須弥の山を右の手に捧げたり、山の左右より、月日の光さやかにさし出でて世を照らす、みづからは、山の下の蔭に隠れて、その光にあたらす、山をば広き海に浮かべおきて、小さき舟に乗りて、西の方をさして漕ぎゆくとなむ見はべし。

（若菜上、一一三―一一四頁）

また、須磨退去中の源氏の元にやってきた明石入道は、夢告の通りに船を漕ぎ、源氏の元へ辿り着いたと語る。

去ぬる朔日の夢に、さまことなる物の告げ知らずることとはべりしかば、信じがたきことと思つたまへしかど、「十三日にあらたなるしるし見せむ。舟をよそひ設けて、かならず雨風止まばこの浦に寄せよ」とかねて示すことのはべりしかば、（中略）まことに神のしるべ違はずなん。

（明石、一三二―一三三頁）

この「さまことなる物」は先行研究において、住吉の神ないし使者、あるいは塩土の老翁と解されるのが通説である^{（注8）}。つまり、明石御方を明石入道の娘として誕生させ、明石一族と源氏を結びつける契機を与えたのは、神の靈験であったと思しい。ここに明石一族・明石御方と「異界」との間に強い繋がりを見出すことができるだろう。

そして、神が一族に授けたのはこれだけではない。私は明石御方の性格もその一つだと考察する。明石御方は、一般に、「身のほど」^{（注9）}を意識しながら「忍従」し、自身を「卑下」する女君とされてきた^{（注10）}。まず「身のほど」意識については源氏と出会う前から描かれており、それは「父・入道の『高き本意』に相反するような形で生じたもの」とされる^{（注11）}のが通説である。父の神への信仰という環境が明石御方の性格に深く影響を及ぼしたとも言えるだろう。

さらに注目したいのが、明石御方が独りで手すさびに「箏

の琴」を弾く場面等、私的に演奏するのは「箏の琴」であるのに対し、源氏から演奏を要請されるのは「琵琶」ということだ。「琵琶」演奏に限らず、明石御方は源氏に与えられた役割に反発することなく耐え、受け入れている。例えば、朱雀院の五十賀という公的な場で行われた六条院女樂では、明石御方は「琵琶」演奏を受け入れたが、加えて、娘の明石姫君について実母としての自分を抑え、後見として力を尽くしたことも、源氏のため公的な役割を果たしたと言えるだろう。そして、後に明石御方は姫君の生みの親として浮かばれ、明石一族の血統や家格としても上昇していく。源氏の言葉に「忍従」し、数ならぬ「身のほど」の自分の元ではなく源氏の元で養育させる、という決断を見るに、最終的に宿願を達成させるための決断には、彼女の性格が少なからず影響している。

反対に、源氏の正妻という「公的な役割」をなかなか受け入れなかった人物として葵の上がいる。例えば左大臣家の娘である葵の上は、実家の政略的思惑を経て結婚し、源氏の正妻という立場を与えられた。文字通りの政略結婚であり、「公的」な結婚であった。しかし結婚後、葵の上は源氏に歩み寄ろうとはしなかった。遂には夕霧出産後に自身の命を落とし、後に実家である左大臣家も独立した夕霧に吸収されてしまうという、明石御方とは、いわば対照的

な道を辿ることとなる。この両者の間には、与えられた役割に耐え、受け入れることができるかどうかという性格の違いが存在するのではないだろうか。

そのことを踏まえ、再び明石一族と神との繋がりについて見ていきたい。

わが君（明石御方）を頼むことに思ひきこえはべしかなむ、心ひとつに多くの願をたてはべし。その返申し、たひらかに、思ひのご時に逢ひたまふ、若君、国の母となりたまひて、願ひ満ちたまはむ世に、住吉の御社をはじめ、はたし申したまへ。

（若菜上・一一四頁）

明石入道は、一族の再興のため住吉の神をはじめ、多くの神々に願を掛けていた。明石御方の存在があればこそ、その願いが叶えられたことに留意すると、明石御方の性格として挙げられてきた、「身のほど」を意識しながら「忍従」し自身を「卑下」するその性格も、宿願達成のためには不可欠なものであったと考えられる。明石御方の性格は、明石一族の血統や家格にとってプラスの結果を呼び起こすために必要なものだったと言える。その性格を結果的に導くのが明石の神をはじめとする神々だと考えると、明石御方と「異界」の繋がりが十分に想起されるのではないかと併せて、明石御方に類似する他の女君達と、「異界」と

の繋がりも確認しておく。吉海直人氏は『源氏物語』において、「上衆めく・上衆めかし」という語に注目するとき、この語が用いられるのは桐壺更衣と明石御方のみであると指摘された^(注12)。明石御方はその血筋から桐壺更衣の「ゆかり」とされ、桐壺更衣を「継承」する存在とも位置付けられるのである。

また、明石御方と六条御息所については人柄の類似が描かれている。明石一族の家系はもともと高貴で、六条御息所と同レベルのものであったと推察できる。御息所と明石御方が同時に源氏の愛を受けることがなかったこと、御息所の怨霊が明石御方には現われなかったことなどからも、明石御方は六条御息所を「継承」する存在とされる^(注13)。

「藤壺・紫の上の系に対する、あるいは、左右大臣家に対する、六条御息所・明石の君を含む家筋の勢力、という配置」については柳井滋氏にも指摘されている^(注14)が、この三人の共通点として、それぞれ皇統の男性と結婚し子どもを儲けていることに気付く。『古事記』『日本書紀』を例示するまでもなく、帝のルーツが神であるとの位置づけがなされていることに照らすに、神聖な「異界」と繋がりがある皇統の男性と結びつく存在としてそれぞれの女君が登場しているということにもなる。

さらに補足となるが、人物の象徴として効果的に白い色

彩が使われる女性達がいる。それが明石御方・夕顔・浮舟である。森田直美氏は『源氏物語』の『白き女』三人が、共に持つ性質として第一に挙げられるのは、交渉相手である男に対する異界性・辺境性ではないだろうか^(注15)とし、特に明石御方については次のように考察されている^(注15)。

明石君の造形では、夕顔の宿同様、色彩豊かな都と、色彩が排除された明石・大堰を対比的に描き、その辺境性や、そこに住むものの悲哀を強調した。また、その一方で正月衣配りにおける明石君の白き装束は、「女帝御衣」をも思わせる、この上なく高貴な「白」の形象であった。そして更には、仏菩薩の变化たる明石君の聖性を支える色でもあるだろう。

やはり、明石御方は、物語の随所で「異界」と結び付けられていると言えよう。明石御方は源氏にとって「異界性」を持つ女君であり、「高貴」な「聖性」を背負う存在であるのだ。明石御方は様々な側面から付与された「異界性」を背負いつつ、物語世界に地歩を占めるのである。

三 光源氏の「押し付け」と明石御方

一、二節にも触れた、源氏から明石御方へのイメージ・役割の「押し付け」について見ていきたい。次の引用は、

①玉鬘卷の衣配りの場面、②若菜下巻の六条院女楽で源氏が女性を花に譬える場面、における明石御方の記述である。

① 梅の折枝、蝶、鳥飛びちがひ、唐めいたる白き小桂に濃きが艶やかなる重ねて、明石の御方に

(玉鬘、一三六頁)

衣配りで、源氏が明石御方に与えた衣に「唐めいたる白き小桂」がある。「唐」は現在の中国のことであり、当時の日本から見れば、その縁遠さからある種の「異界」と言っても良からう。二節にも触れたとおり、衣の色「白」からも「異界」のイメージを読み取ることができると指摘されていた^(注16)。

また、「琵琶」の「異界性」については前述したが、明石御方の「琵琶」を演奏している姿が花に譬えられている場面がある。

② 琵琶をうち置きて、ただけしきばかり弾きかけて、たをやかにつかひなしたる撥のもてなし、音を聞くよりも、またありがたくなつかしくて、五月まつ花橘、花も笑も具して押し折れるかをりおぼゆ。

(若菜下、一九三頁)

明石御方が譬えられている「橘」について、岩坪健氏は「その実は『常世の国』から勅命を受けて持って来た『時じくの香の木の実』であり(『古事記』、中巻、垂仁天皇、こ

こにも琵琶と異郷との繋がりが見られる」^(注17)とされ、「異界」との繋がり指摘されている。

このように見ていくと、源氏による二度の「琵琶」演奏の要請と同様に、源氏が明石御方にあてがう衣・花の譬えはどちらも「異界性」を持つことが分かる。やはり一節で示した仮説のとおり、源氏は明石御方に「異界性」のイメージを押し付け、また、それを担う役割を押し付けているのではないだろうか。

さらに六条院では、女君達の町の割り当ては源氏自身が行っているが、ここから、町の割り当てについても源氏が決定した、即ち、「押し付けた」ものであると考えることができる。六条院のそれぞれの町については次のように説明される。

八月にぞ、六条の院造りはてて渡り給ふ。未申の町は、中宮の御ふる宮なれば、やがておはしますべし。辰巳は、殿のおはすべき町なり。丑寅は、東の院に住み給ふ対の御方、戌亥の町は、明石の御方と思しおきてさせたまへり。
(少女、七八頁)

女君達とその住まう町の季節との関わりについて見ていきたい。まず、秋好中宮が初めて登場するのは、彼女が斎院に卜定されて伊勢に下向する直前の場面である。下向は九月までと決められている通り、この季節は秋。その後も、

秋好中宮は母御息所と行動を共にし、秋に多く登場している。二人が帰京したのも、六条御息所が逝去したのも秋であった。また、秋好中宮は六条院の造営前の場面においても、特に秋の夕べは「はかなう消え給ひにし露」（薄雲、四六二頁）、つまり亡き母にもゆかりのあるもののように懐かしく思われるのだと語り、季節の中でも秋を好んでいることが分かる。薄雲巻の紫の上と秋好中宮の春秋優劣論について、玉上琢彌氏は、

「女御の秋に心をよせたまへりしもあはれに、君の曙に心しめたまへるも道理にこそあれ」と女御は秋、紫の上は春ということが述べられた。（中略）女御は、とりあえずいまの季節、秋を選んだ。母君の思い出しの季節として。秋に対する春は紫の上であった。登場のはじめから、彼女は桜とともにあり、春の雰囲気ともなっている。明朗快活の若さがある。齋宮の女御の重々しさに対照的である。その母御息所も物語に出るのは秋が多い。

と述べられている（注18）。六条院造営及び町を割り当てられる前から、秋好中宮は秋、紫の上は春との関わりが確立されていたとも言えるのだ。

夏の町に住む花散里についても見ていく。彼女は、「五月雨の空めづらしく晴れたる雲間」と初夏に初登場を果た

して以降、多く初夏に登場することとなる。清水婦久子氏も、「花散里は）五月雨の頃になると思い出される女君として印象づけられてきた。作者は、このあたりで意識して彼女と夏を結び付けようとしていたのであるう。」（注19）と述べておられる。また、一時的に夏の町に住んでいた玉鬘も夏との関わりを持つ。彼女が初めて登場するのは、母である夕顔と同じく夏である。以降、登場する場面に季節の偏りは見られないものの、夕顔から頭中將へ贈られた手紙には「撫子」の歌が詠まれていた（注20）。夏から初秋にかけて咲く常夏の花、「撫子」と玉鬘が結び付いていたことから、夏のイメージが想起される。

このように、紫の上は春、花散里と玉鬘は夏、秋好中宮及び母六条御息所は秋に、六条院完成以前から彼女達は自分の住む町の季節に登場し、多く関わりを持たされていた。しかし、明石御方の場合に限っては、何故かそうではない。明石御方が六条院入り前の冬に登場するのは、源氏が明石姫君を引き取る前の場面のみであり（注21）、その上、『源氏物語』において、「冬に起こった出来事については、『別離』と『故人の追慕』が多く見られる（注22）と指摘されるように、この場面の冬は「別離」と結び付いているのであって、明石御方その人と結び付いているとは言い難い。現に、明石御方以外にも冬に逝去した桐壺帝、出家し俗世

と別離する藤壺や朱雀院も冬の別離と関わって描かれていると言えよう。^(注23) 前に見てきた紫の上、花散里と玉鬘、秋好中宮及び六条御息所とは違い、彼女自身は物語内で積極的に冬の関わりを持たされてはいないと言わざるをえない。実子との別離という印象的な場面ではあるが、やはり、明石御方を「冬」の町の女主人としたことには、何か別の理由があるのだろうか。

それでは、別の視点から六条院について見てみる。六条院は、四方四季の形態の邸となっている。このことについては「まるで四季の眺を同時に賞でるといふ竜宮城と同様だ」^(注24)と指摘される。四方四季の六条院は竜宮浄土の信仰にもつながり、若紫巻で「海竜王の后になるべきいきむすめ」と呼ばれる明石御方の住む邸として相応しい。

また、匂兵部卿巻において六条院と明石御方は、

二条院とて造り磨き、六条院の春の殿とて世にのしりし玉の台も、ただ一人の末のためなりけりと見え
て、明石の御方は、あまたの宮たちの御後見をしつつ、

あつかひきこえたまへり。^(匂兵部卿、二十頁)

と語られている。源氏没後の六条院は明石中宮の里邸となり、東宮や匂宮らの生育拠点として機能することとなる。明石一族の血統と関わる人々が長期的に権力の中枢を占めようことに照らすに、六条院は、結果的に、明石一族の繁

栄を支えるべく造られたような邸であるともいえる。この用例からも分かるように、六条院自体が、源氏から明石御方に必然的に引き継がれる、言わば、「押し付け」られたもののひとつであるのだ。要するに、源氏は自身の一族の先の繁栄の礎を作った明石御方を、「異界性」を伴う女君として、源氏の栄華の象徴である六条院に据えておきたかった、ということではないだろうか。

ここで、直前に引用した竜宮浄土信仰と関わって海幸山幸説話について触れておく。明石一族については、源氏の明石・須磨への流離から明石御方が姫君と離別するまでの物語に海幸山幸説話の話型が介在しているということがしばしば指摘されている。^(注25) この説話と『源氏物語』の關係については、多く次のように解されている。

光源氏流謫の物語と記紀の伝える海幸山幸説話の対応關係に、朱雀院は海幸、光源氏は山幸、朧月夜は釣鉤、明石は可怜小汀、明石入道は海神、明石君は豊玉姫。(中略)海幸山幸説話はまた異類のものとの特殊婚譚で、(中略)離婚と母子別離が定型である。とすると、明

石君が洛外大堰に忍び所としてどどまり、所生の愛児と離別せねばならなかった本物語の構想もまた、海幸山幸説話の原型準拠の必然であると言えよう。^(注26)
さらに先行研究において、そのことを踏まえた上で、明

石御方と豊玉姫との重なりについて、「明石の君はトヨタマビメに比定されるが、最大の相違点としては、トヨタマビメのように海に帰ることはなく、六条院で暮らし続けたことが挙げられる。」^(注27)とされている。明石御方は、本来帰らなくてはならない場所があったにも関わらず、そこに帰らなかったことになるが、だとすると、当然そのことで六条院にも何らかの影響があったと考えられよう。今まで注目されてこなかったこの相違点が、実は後々の物語世界に影響を及ぼす火種になり得ているのではないか。次節にて考証しよう。

四 六条院崩壊の火種としての「冬の町」

明石御方が冬の町の女主人であることについて、先行研究においては、薄雲巻の姫君との別離の直前に明石御方が、我が身を嘆きながらちらつく雪や霰を眺めていたこと、また、

・末遠き二葉の松にひきわかれいつか木高きかげを見る
べき
(薄雲、四三四頁)

・年月をまつにひかれて経る人にけふ鶯の初音きかせよ
(初音、一四六頁)

これら二首を明石御方が詠んだことから、例えば、伊藤禎

子氏・正道寺康子氏・八島由香氏によって、「冬の町の代表的な景物である「雪」や「松」は、もともと明石の御方と姫君に深く関わるものである」^(注28)と解説される。「冬の町の代表的な景物」との結び付きから明石御方が冬の町に相応しいとされているが、雪については、明石御方自身と結び付いているというより、前節にも触れたとおり、別離の辛さの心象風景と結び付いているようである。また、松は、確かに明石母子に関わる景物ではあるが、歌をよく見てみると、松は明石姫君その人を指していることが分かる。いづれにしても、明石御方自身と結び付いた景物ではないと言つて良いだろう。また、秋山虔氏は次のように述べておられる^(注29)。

明石の君に「冬の御方」(梅枝)という名が与えられていることは、彼女がこの冬の町の人だからという以上、この呼称そのものがその人生を象徴するようである。(中略) 幸運とひきかえに、自分に強いなければならなかったのは、女として母としての自然な感情を封印する不断の努力であった。彼女はわが娘を后がねとして育成しようとする源氏の要請に従つて手放すほかなかったが、その母子生別の悲愁の語られる「薄雲」巻、ここに身も心も凍る山の雪景色がかたどられたのである。(中略) かきくらし降りつむ雪の朝、汀

の氷に見入る彼女の感情は一色の白銀の世界のなかで凍えていたといえよう。

娘のために耐え忍ぶ明石御方自身の性格、薄雲巻の母子別離の場面から、明石御方は冬の町に相応しい人物であるとされている。確かに、母子別離が語られる薄雲巻には「冬になりゆくままに」とあり、明石御方にとって印象的な場面が冬の季節であることには間違いないであろうし、彼女の寂寥たる心象が冬の風景を想起させようことにも頷ける。しかし、前者について、先に述べた通り、冬の別離が描かれるのは明石御方ばかりではないし、また後者について、裏を返せば、そのような具体性を欠いた心象風景のみでしか明石御方と冬の結び付きを想定できないということにもなる。

既に見たとおり、先行研究においては、明石御方は冬との関わりを持たされた人物であつて六条院の冬の町は彼女に相応しい町である、とされてきた。しかし、繰り返すが、六条院入りする紫の上、花散里と玉鬘、秋好中宮は、そこへ入る前から当該の季節と多く関わりを持ち、その季節の町の女主人となつていた。それに引き替え、六条院入りする前の登場のほとんどが秋の季節であり、冬には一度しか登場しない明石御方を、冬との関わりを持つ女君だと断ずる御見解については、再検討が必要なのではないか。

やはり、明石御方は、本来は六条院入りするべき人物ではなかつた、と考えられないだろうか。例えば、海幸山幸説話の話題同様に、明石御方が元々いた場所に帰り、冬の町が主人不在であればどうなるか。六条院を造営する際、もしも冬に相応しい女君が存在しなかつたとすれば、冬の町自体を造らない選択肢もあつたかもしれない。しかし、だからといって冬の町を造らずに一町欠けた形で六条院を造るのも不自然であるし、また、野村精一氏が指摘されるように、「六条院が四方四季の館の信仰」とも結び付いている^(註30)ならば、やはり、六条院は、最初から冬が存在する邸として造営されなければならなかつたはずである。

また、六条院に入る前から冬に多く関係しているような、冬の町に相応しい女君は六条院造営に近い時期には他に見られない。明石御方がいない状態で六条院を四方四季の町として造営しても、冬の町はどの女君にも割り当てられないことになつてしまう。だとすると、後に登場するであろう、それに相応しい女君に冬の町を割り当てれば良いはずだ。そこで、後に登場し、六条院入りすることになる女君、女三の宮を想起したい。六条院造営の五年後に女三の宮が六条院に降嫁する際、春の町に入ることになるのは周知のとおりであるが、それが春の町でなければならぬ必然性があつたのかを確認してみよう。

女三の宮が、人々の話の上でなく、実体を伴って初めて登場するのは、彼女の装着の儀の場面である。

年も暮れぬ。朱雀院には、御心地なほおこたるさまにもおはしまさねば、よろづあわたたくしく思し立ちて、御装着のことと思しいそぐさま、来し方行く先ありがたげなるまでいつくしくのしる。

(若菜上、四一〜四二頁)

「年も暮れぬ」から、季節が冬であることが分かる。また、この三日後に朱雀院は出家し、見舞いに来た源氏に娘である女三の宮の後見を再度依頼する。源氏はそれを受諾し、翌朝、紫の上に女三の宮の降嫁の件を伝える。その場面は「雪うち降」る、冬を意識した叙述から始まる^(注32)。女三の宮自身は登場しないものの、その降嫁が決定し、源氏が紫の上から許しを得たのも初登場と同じく季節は冬。女三の宮の人生における大事な決定は、冬に集中して行われている。

また、女三の宮が降嫁した後、源氏が彼女の元へと通つた夜、夢に紫の上を見た源氏が急ぎ帰る場面がある。春の場面ではあるものの、背景で「雪の光みえて」いることが描かれている^(注32)。本来ならばその季節に馴染まない景物を敢えて描写することで、「雪」などそれらの景物が印象深く強調されてこよう。この春の場面に雪を描くことで

女三の宮は冬の象徴である雪と結び付けられ、冬との結び付きを持つ存在であると強調されていると考えられないか。

このように、明石御方を除く他の女君達と同様に、女三の宮は、六条院入りする前から冬の季節と関わりを持ち、冬を象徴する雪とも結び付いていた。女三の宮は、春ではなく、むしろ冬との結び付きを強く持っていたのだ。そうあつてみれば、源氏の妻として六条院入りする立場や身分、冬との結び付きから見ても、冬の町に入るに相応しい女君は、実は女三の宮その人だったのではないか。

そのことを確認するため、女三の宮が他の町にいる女君の代わりとしてそこに住むことができたかどうか、残りの夏の町と秋の町についても見ていきたい。まず、夏の町には花散里が住む。源氏の実子である夕霧の母代わりとなり、源氏は自身の元で世話をしようと考えた玉鬘の後見も彼女に頼むのだった。花散里は、源氏の実子夕霧と玉鬘の養母であり教育係でもある。源氏は当然、花散里を別の場所に移すことはしにくいだろう。また源氏は、自身が花散里に對してあまりに虫のよい態度をとっていることを自覚している^(注33)。後ろめたい気持ちを持つ源氏であつてみれば、花散里から夏の町を奪い、代わりに女三の宮を住まわせるということはできないと思われる。また、夏の町に住

んでいた玉鬘については、源氏が、花散里とであれば「あひ住み」をするにしても「忍びやかに心よくものしたまふ御方」であるため、「うち語らひて」くれるだろうと考えていた。夕霧の時と同様に、玉鬘の世話をするのも花散里が相応しいと感じた源氏は、彼女に後見を依頼したのだ。玉鬘の後見として花散里に目を付けたのだから、花散里が夏の町にいる限り玉鬘が夏の町から出て行くことはない。また、後に玉鬘は鬚黒と結婚し、六条院を出ることとなるが、玉鬘が夏の町から出て行ったとしても花散里はそこに住み続けるのだから、他の女君が夏の町に住まうことは、どちらにしても不可能である。

次に、「未申の町は、中宮の御旧宮なれば、やがておはしますべし」（少女、七八頁）と本文にもあるように、秋の町は秋好中宮に割り当てられた。六条院の秋の町があった場所には彼女の亡き母である六条御息所の邸があり、娘である秋好中宮がこれを伝領しているのだ。しかも、この場所を中宮の里邸として使用している今、秋の町から秋好中宮を追出すことは不可能である。

このように、花散里と玉鬘にも秋好中宮にも、それぞれ町の町に住むべき季節との関わりが見られ、また、立場上からも自分の町を追われても最も支障がないのは、やはり、明石御方である。つまり、そもそも明石御方が冬の町に入

らず、その代わりに女三の宮が冬の町に入ることが、最も自然な六条院のあり方だったのではなかるうか。明石御方が冬の町から出ることが一番、物語の進行に影響がなかったはずなのだ。

玉上琢彌氏は、紫の上を東の対に移し、正室扱いであった紫の上を側室の地位に下げて、皇女を正室として六条院に迎え入れる準備を始めた後、秩序が保たれていた六条院は一転して崩壊へと進んでいくこととなる、とされた^(注34)。また、森一郎氏が「女三の宮降嫁の事件は第一部とは打ってかわった第二部の暗い世界を導く大きな失敗の事件で、この事件のために紫の上の病氣、宮の不祥事、宮の出家、柏木の死、紫の上の死と不幸が相次いで起こることになった」^(注35)と述べておられるように、女三の宮の降嫁が大きな要因となつて六条院の秩序が崩壊したことは疑いない。そこで、女三の宮の降嫁によつて六条院の秩序が崩壊したとする時に重要な出来事となる①柏木と女三の宮との密通、②気苦労による紫の上の重病、について確認しておきたい。

① 柏木と女三の宮の密通

若菜上巻の六条院における蹴鞠は、元々丑寅の町、即ち夏の町で行われていたが、源氏の招きによつて場所を変え、春の町の東面で行われることになった。この時、柏木が偶

然女三の宮を垣間見てしまったことがきっかけで、柏木は女三の宮への気持ち募らせ、密通してしまう。女三の宮の住む町が六条院の春の町でなかったならば、柏木が女三の宮を偶然垣間見ることも、密通が起こることもなかったのではないか。

② 気苦労による紫の上の重病

清水婦久子氏は紫の上について、次のように述べておられる^(注36)。

紫の上は、「胡蝶」「常夏」「真木柱」の巻で「春の上」と呼ばれ、春の町における、春の物語の主人公であった。(中略)ところが、「梅枝」の巻になると、彼女は「対の上」と呼ばれるようになるのである。この呼称は、彼女の居場所による。

「対の上」の呼称は、彼女が東の対に住むようになったことによる。さらに清水氏は、春の町の主人公であった紫の上の寝殿からの移動について、「紫の上が正妻として寝殿に構えていることが不都合になったからであろう。作者は紫の上以外の、寝殿に住むべき人を構想しているのだと考えられる」との玉上氏の御見解^(注37)を引用した上で、

紫の上が寝殿に住んでいた頃(「初音」)「野分」の巻)の春の町の物語は、紫の上を主役としていた。そして、「梅枝」の巻では、東の対に居る紫の上はほとんど登

場せず、明石姫君入内の準備をする光源氏を中心に描かれた。姫君入内後、寝殿に入った女三宮は、その後、六条院春の町の物語の主人公となる。

と述べておられる。「春の上」「北の方」と呼ばれ、春の町の女主人として、かつ六条院の正妻格としてあった紫の上は、女三の宮の降嫁によりその座を奪われただけでなく、居場所を移されることよって象徴的にも女三の宮からその地位を奪われてしまう。もしそれらのことがなければ、紫の上の気苦労も少しは緩和され、重病を得ることは避けられたかもしれない。

このように、確かに女三の宮が降嫁したことも問題なのだが、それ以前に、六条院の春の町が女三の宮の居場所になってしまったことが重要であり、したがって、それが六条院秩序の崩壊の、そもそもの契機だったのではないかと考えられる。だとすると、その原因は、本来は元々の居場所に帰らなくてはならなかった明石御方が、六条院の冬の町に居続けたことにあると言えないか。明石御方が六条院に迎え入れられず、女三の宮が冬の町に入ることになっていけば、六条院内の秩序は保ったままでいられたはずなのである。つまり、本来であれば源氏の元を去らなければならなかった明石御方がそこに留まることで、彼女の住む冬の町を火種として源氏の栄華の象徴である六条院秩序は崩

壊していくのである。いわば、六条院秩序の崩壊は、明石御方を「異界性」の女君として六条院繁栄の象徴とし続けた源氏の、繰り返される「押し付け」を端緒としており、また、明石御方が冬の町に留まらざるを得なくなったことにあるのだ。六条院崩壊の要因となるのは、女三の宮ではない。その秩序崩壊の本当の原因となった女君は、実は明石御方であったのだ。

おわりに

明石御方は「琵琶」を始めとして、天界と結び付いた「異界性」を伴う女君であった。その「異界性」は、源氏の栄華を支える一つの力となったといえるだろう。明石御方の演奏する「琵琶」について見ていくと、その性格は演奏者である御方と同様に、天界と結びついた「異界性」を担うものであった。竹内正彦氏が「光源氏は明石君の（けはひ）の背後にそうした神の存在をかざわけた」^(注38)と指摘されるが、源氏は明石御方に「異界性」を見出し、自分にとってプラスの効果を期待しつつ、彼女を自身の栄華の象徴である六条院に据えたのだらう。しかし、それは海幸山幸説話の話型に則って進行していた物語の流れに背く禁忌でもあった。

本来、源氏の明石・須磨への流離（明石御方と姫君の離別の物語は「海幸山幸説話の話型」と対応していたのであり、豊玉姫に重ねられた明石御方が元の居場所へ帰ることによって、六条院の繁栄と安定は果たされるはずだったのだ。源氏はその流れを無視して彼女に六条院という居場所を与え、本来いるべき場所に帰らせようとしなかった。つまり、源氏が明石御方に「異界性」という役割を押し付けてしまったことが六条院秩序の崩壊に繋がったのであり、その要因となる女君はつまるところ、明石御方その人だったのである。

注

1 引用の源氏物語本文及び頁数は『新編日本古典文学全集』に拠る。底本は大島本（但し、桐壺・帚木・花宴は伝明融筆臨模本、花散里・野分・柏木・早蕨は伝定家筆本、初音・夢浮橋は池田本、若菜上・下・橘姫・浮舟は明融本）である。

2 マイナスイメージを伴って描かれる琵琶を演奏する女性について、『新編日本古典文学全集』の「うつつは物語」の頭注には、「琵琶の演奏の姿は、下に置いて前傾姿勢で演奏する箏や和琴に比べると、上半身がより直立に近くなり、女性のすわった姿としては異様である」と解説が付されている。

3 引用のうつつは物語及び頁数は『新編日本古典文学全集』に拠る。底本は尊経閣文庫蔵四家各筆本である。

例えば、「琴の琴（七弦琴）」と「箏の琴」については、岩坪健氏が「源氏物語における弦楽器のジェンダー——男性性の楽器と女性性の楽器——」（『社会科学』43）同志社大学2014・2）において次のように述べられている。

・七弦琴は、中国では君子が嗜むものとして尊ばれ、（中略）貴人にふさわしい名器であるので、弾き手は皇統の人々に限られ、（中略）諸楽器の中でも最上位に位置付けられた。

・箏は奈良時代に中国から伝来したが、王朝人は女性向きの楽器と捉えていたようである。（中略）「これは、女のなつかしきさまにて、しどけなう弾きたるこそ、をかしけれ」とおほかたにのたまふを（明石、二四一頁）と源氏が述べたように、箏は女性が気楽に弾くに相応しい楽器と見なされていたことが分かる。

岩坪健氏 注4の御論文に同じ。

「なにがしの皇子」が天人から琵琶の秘曲を伝授したという説話を匂宮が語っている条に関して、森野正弘氏は「明石入道と琵琶法師」（『源氏物語の音楽と時間』新典社2014）で「これに類する説話が、徐々にその人物を変奏しながら他の文献にも伝えられていた」と述べておられる。『河海抄』では、西宮左大臣（源高明）が霊という異界のものから「琵琶」の秘曲を伝授されたことが挙げられており、これに類する説話は『吉野吉水院楽書』『古事談』『十訓抄』『江談抄』等にも登場しているという。源高明（九一四～九八三）は源氏物語成立以前に生きた人物であり、この説

話が多くの文献にも登場していたことから考えると、「琵琶」と異界との繋がりは当時、多くの人に周知されていたと考えられる。

7 近き几帳の紐に、箏の琴のひき鳴らされたるも、けはひしどけなく、うちとけながら掻きまさぐりけるほど見えてをかしければ（明石、二五七頁）

8 柳井滋氏は「宿世と靈験」（『柳井滋の源氏学 平安文学の思想』武蔵野書院 2019）において、「さまことなる物」について次のように述べておられる。

源氏の夢に現れたのも、入道の夢に現れたものと同じ住吉の神ないし使者（阿部『物語史の研究』昭42）、あるいは使者の塩土の老翁（石川徹「光源氏須磨流謫の構想の源泉について——日本紀の御局新考」『国語国文学報』昭35・11）と解するのが通説である。

9 明石御方の「身のほど」意識については、伊藤禎子氏・正道寺康子氏・八島由香氏「人物ファイル—明石の君」（『人物で読む「源氏物語」第十二巻 明石の君』勉誠出版2006）を参考にしている。

10 明石の御方の性格について、秋山虔氏「明石の君」（『源氏物語の女性たち』小学館 1987）では「思えば文字どおり忍従と卑下の一語に尽きる長い年月であった。（中略）東宮のもとに入内した姫君は、やがて懐妊し、若君が誕生したが、そうした際にも、明石の君はけっして驕り高ぶることなく、女房並みにへりくだった立ち居ふるまいに終始した。」とされている。

- 11 伊藤禎子氏・正道寺康子氏・八島由香氏 注9の御解説に同じ。
- 12 吉海直人氏は「『上衆めく』」と明石の君（『源氏物語』の特殊表現）新典社 2017）において、桐壺更衣と明石の君の関係を「この二人は血縁関係にあり、また総体的に身分がやや低いという共通性を有していた。その二人が少ないながら全用例を分け合っているのである。というよりも、桐壺更衣の立場を明石の君が継承しているのである。（中略）。二人は相似形であり、紫のゆかりとは別のもう一つのゆかりと見ることもできる。」と考察される。
- 13 武原弘氏「明石の君についての一考察―第一部を中心に―」（『日本文学研究19』1983、11）
- 14 柳井滋氏 注8の御論文に同じ。
- 15 森田直美氏「夕顔・明石君・浮舟の象徴色『白』に関する試論」（『平安文学における色彩表現の研究』風間書房 2011）
- 16 森田直美氏 注15の御論文に同じ。
- 17 岩坪健氏 注4の御論文に同じ。
- 18 玉上琢彌氏「源氏物語評釈」第四卷 角川書店 1965
- 19 清水婦久子氏「源氏物語『六条院』の変容」（『源氏物語の風景と和歌』和泉書院 1997）
- 20 山がつの垣ほ荒るとも折々にあはれはかけよ撫子の露（帚木、八二頁）
- 21 冬になりゆくまに、桂の住まひいとど心細さまざりて、（中略）うち泣きつつ過ぐすほどに、十二月にもなりぬ。雪、霰がちに心細さまざりて、あやしくさまざまにもの
- 22 鈴木加緒里氏「明石の君の存在意義―『源氏物語』の主題との関わりから―」（『埼玉大学国語教育論叢』13 埼玉大学国語教育学会 2010）
- 23 冬の別離と関わって描かれる人物の記述については以下の通りである。
- 24 桐壺帝の逝去（賢木、九七頁）、藤壺の出家（賢木、一三〇―一三一頁）、朱雀院の出家（若菜上、四四頁）
- 25 『古事記』・『日本書紀』に描かれる海幸山幸説話のあらすじは次のようである。また、引用の『日本書紀』及び頁数は『新編日本古典文学全集』に拠る。
- 26 兄（海幸）と弟（山幸）とが釣針と弓矢を交換し、弟は兄の釣針を失う。返却を迫られて困惑している時に塩土老翁に会い、海宮に案内されてその釣針を取り戻す。尊（山幸）が本土に帰るに際し、海神から満珠・干珠の二

玉をもらい、姫の妊娠を告げられ、産屋を作って待つ。本国に帰った尊(山幸)が兄を服従させ、兄は俳優となつて仕える。姫は海辺で出産するが禁を破つて夫がのぞき見したのを怒り、海中に去つてしまふ。

26 『日本書紀』神代上、一五五―一六二頁(一部改)
木船重昭氏「母子別離」(講座 源氏物語の世界) 第四集
有斐閣 1980・11)

27 伊藤禎子氏・正道寺康子氏・八島由香氏「人物ファイル―明石の君」(『人物で読む『源氏物語』第十二巻 明石の君』勉誠出版 2006・5)

28 伊藤禎子氏・正道寺康子氏・八島由香氏 注15御論文に同じ。

29 秋山虔氏「雪景色」(『源氏物語の女性たち』小学館 1987)

30 野村精一氏「六条院の四季の町」(講座 源氏物語の世界 第五集) 有斐閣 1981) 以下抜粋部を参考とする。

四季四方の館の信仰は、物語作品では、『宇津保物語』と『栄華物語』にあらわれたにとどまるが、広く縁起物や歌謡まで含めれば、竜宮信仰と結び付いて、中・近世期には多様に存在したという。いまのところ『宇津保物語』以外は、『源氏物語』以前にさかのぼる徴証たりえないが、蓋然性は指摘しうるだろう。

またの日、雪うち降り、空のけしきもものはれに、過ぎにし方行く先の御物語聞こえかはしたまふ。

(若菜上、五一頁)

32 妻戸押し開けて出でたまふを、見たてまつり送る。明けぐれの空に、雪の光みえておぼつかなし。

(若菜上、六八九頁)

33 源氏の花散里に対する態度について、『新編日本古典文学全集』では「源氏は花散里を愛妾として見向きもしないで、子供の世話をのみ依頼する。源氏の言葉が丁寧で花散里をしきりにもちあげるのは、その虫のよさに気がさすのであろうか。」(玉鬘、一二九頁)との頭注が付されている。

34 玉上琢彌氏「源氏物語評釈」第六巻 角川書店 1966
以下抜粋部を参考とする。

源氏の栄華を表わす六条の院の生活は、完璧なものではない。そのために紫の上を頂点に置いて、六条の院の秩序が保たれたが、紫の上の実力だけによる統制では、形の上では完璧とは言えない。(中略)六条の院の頂点に立ち得る実力を持つ紫の上に、正妻の地位が与えられてはじめて、源氏の家庭生活は完璧であると言えるのである。作者はそのことを計算に入れて、六条の院に移つてからの紫の上を頂点に引き上げたのである。(中略)ところが、「真木柱」の巻を書き上げた後に、作者は皇女の六条院降嫁を構想しはじめたのであろう。そのために「梅枝」の巻に、紫の上を東の対に移し、ふたたび側室の地位に下げて、皇女を正室として六条の院に迎え入れる準備をしたのだと考えられる。

35 森一郎氏「女三の宮事件の主題性について―柏木との事件に関する一考察―」(『源氏物語の方法』桜楓社 1969)

36 清水婦久子氏 注19の御論文に同じ。

37 玉上琢彌氏 注18に同じ。

38 竹内正彦氏「明石君の〈けはひ〉」―伊勢の御息所にいと

ようおぼえたり』をめぐって―」（『群馬県立女子大学紀要』

26 群馬県立女子大学紀要委員会 2005. 2）

〈謝辞〉

本稿は、平成二十九年度提出の卒業論文がもたなくなって
います。本稿を成すにあたり、当時と同じく中井賢一先生
のご指導を仰ぎました。

卒業以来、銀行の業務に勤しんでおりますが、昨春、中
井ゼミでの厳しくも楽しかった日々を思い出し、かつての
研究内容を公にしてみたい旨を先生に相談させていただい
たところ、本誌への投稿を勧めていただきました。それ以
降、何度も読み合わせをして下さり、熊本県立大学ご転出
後までも、細やかにご指導下さった中井先生に、改めて深
く感謝申し上げます。先生のご転出は、大学にとっても学
生たちにとっても大きな損失であると思えます。これまで
お教えいただいたことが様々に思い出され、悲しみは尽き
ませんが、先生の新天地でのご活躍とご健康を心よりお祈
りし、謝辞と致します。